

設楽発掘通信

No.76
令和5年
1月号

マサノ沢遺跡の発掘調査を開始しました

一月中旬よりマサノ沢遺跡の調査を開始しました。マサノ沢遺跡は二〇一七
年に調査が行われており、縄文時代後期中葉（約三五〇〇年前）を中心とする
墓地関連遺構と縄文時代晩期後葉（約三〇〇〇年前）から弥生時代前期（約
二五〇〇年前）までの土器棺墓が確認されました。また、ハート形土偶の胴体が
東海地域で初めて出土し注目された遺跡です。

今年度の調査は二〇一七年の調査区北側に位置し、22A区、22B区として
調査を行なっています（図1）。22A区は年末までに調査が終了しましたので
ここで紹介します。22A区は調査区の西側境川寄りに縄文時代中期後半・縄
文時代晩期後葉から弥生時代前期の遺構・遺物が確認されています（図2）。縄
文時代中期後半は石囲炉を持つ竪穴建
物跡0027SXが見つかりました（図
3）。建物内に土器片と大型剥片石器が
出土しています。また、竪穴建物は二
棟重複していることを確認しました。
弥生時代前期は竪穴建物跡0020S
Iの一部が見つかっています。また、
縄文時代晩期と考えられる五角形鏃の
両側辺を大きくえぐった飛行機鏃が
0021SXから出土しました（図4）。
年明けから22B区を調査しています。
どんな遺構・遺物が見られるか楽しみ
です。
(社本有弥)

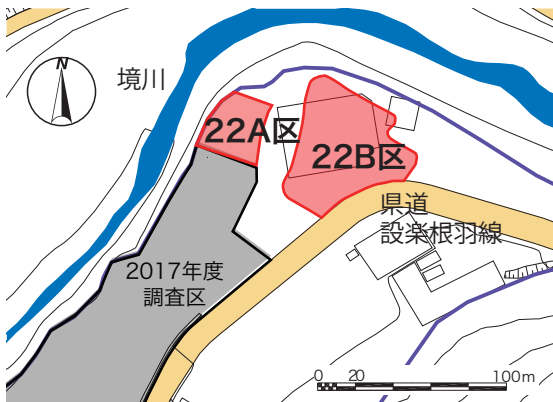


図1 マサノ沢遺跡調査区の位置図 (S=1/4000)



図3 石囲炉 (0027SX内)



図4 飛行機鏃 (0020SI出土)

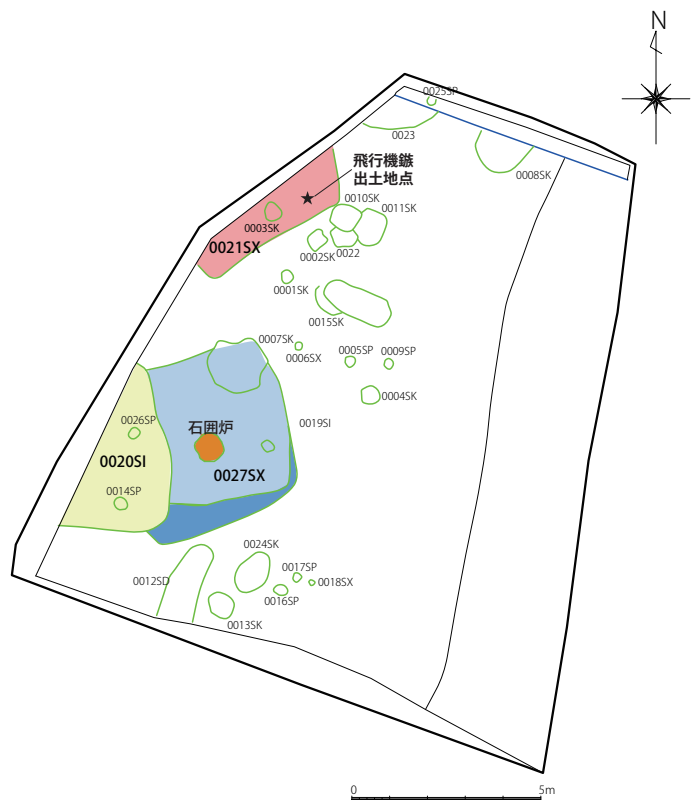


図2 22A区遺構全体図

大畑遺跡の発掘調査

一二月月上旬をもって大畑遺跡の発掘調査が終了しました。ご協力いただきありがとうございます。今回は大畑遺跡の概要と今年度調査の成果についてご紹介していきます。

大畑遺跡は東から境川、北から戸神川の二つの川が合流する場所の北東側丘陵上にあります。遺跡の範囲には、西側と東側の二カ所のピークをもつ丘陵があり、二つの丘陵間は谷が形成されています。遺跡は二〇一七年度に一度調査が行われ、竪穴建物跡や陥し穴が見つかりました。遺跡の時期は縄文時代中期後半から後期(四五〇〇〜三五〇〇年前)が中心となっています。今年度の調査は前回調査した調査区から北東に延長した箇所を22A区、前回調査ができなかった鉄塔の跡地を22B区として調査を行いました(図5)。どんな成果が見つかったのでしょうか、見ていきましょう。

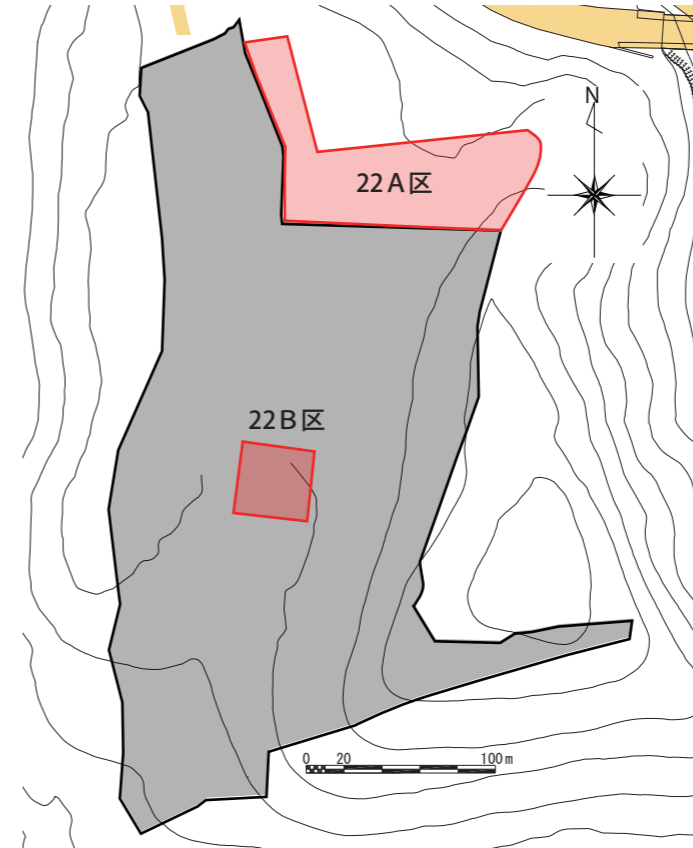


図5 大畑遺跡調査区位置図



図7 竪穴建物跡群



図8 陥し穴完掘状況(中央の穴は杭穴)

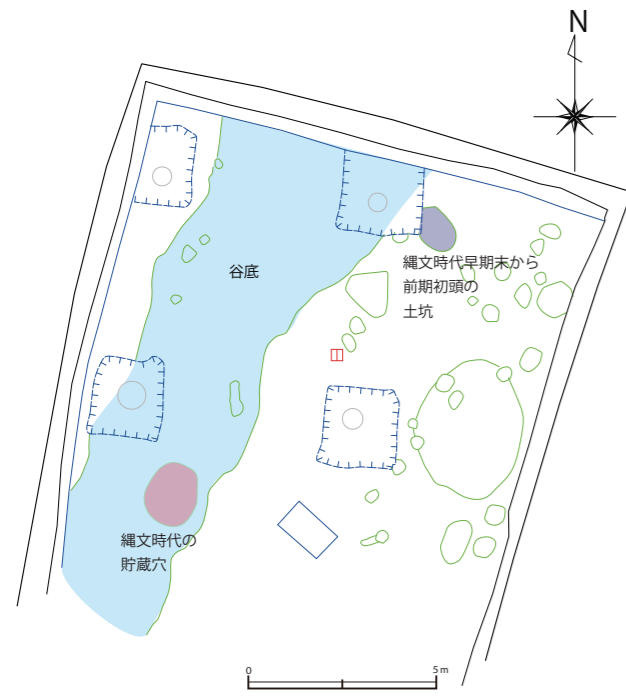


図9 大畑遺跡22B区遺構全体図



図10 貯蔵穴完掘状況



図11 土坑内遺物出土状況

22A区は調査区の東西両側から中央に下がっていく谷地形となっており、調査区中央から西の傾斜は緩やかで、ここに遺構・遺物が展開していました(図6)。遺構は竪穴建物跡四棟、陥し穴①一基を調査しました(図7・8)。竪穴建物跡は時期のわかっているものは縄文時代中期後半の竪穴建物跡二棟のみです。残りの二棟と陥し穴は縄文時代の遺構であると考えていますが、遺物は出土しておらず、詳しい時期はわかりません。また、竪穴建物跡群の北側、谷に落ちていく所で石核や剥片が多く出土する石器集中範囲がありました。これは石器を作成した際の石屑の捨て場と考えています。このように22A区では、居住域と捨て場といった集落のあり方の一端が見られる良い成果になったといえます。



図6 大畑遺跡22A区遺構全体図

22B区は調査区中央西から南西に向かって伸びている谷底とそこに下がっていく緩斜面地となっていました。主な遺構には土坑一基と貯蔵穴一基があります(図9)。遺物は縄文土器と叩き石や凹石といった礫石器が出土しました。
貯蔵穴は谷底から見つかりました(図10)。大きさは長径約二m、深さ約一mあり、平面形はやや楕円形を呈していました。土層の堆積を観察したところ何度か掘り起こされている様子が確認できました。土坑は東の緩斜面地で見つかりました。浅い皿状で土器・石器がまとまって出土しました(図11)。出土した土器は縄文時代早期末から前期初頭頃となっており、設楽ダム関連遺跡ではほとんど出土していない時期の土器となります。谷の斜面地から出土したため、斜面の上にある平地部分に古い段階の遺構・遺物が展開していると考えられます。
(社本有弥)

胡桃窪遺跡では平安時代に鍛冶作業を行っていました

二〇二〇年度に発掘調査を行った胡桃窪遺跡（設楽町大名倉字胡桃窪・丸山）の報告書がまもなく刊行される予定です。今回はその内容の一部を紹介します。

胡桃窪遺跡のB区（県道瀬戸設楽線より北側・図12）には竪穴建物跡が合計五棟検出されましたが、そのうちの二つ、100SIは炉跡・焼土の集積・炭を多く含む平安時代中頃（一〇世紀前半）のものでした（図13）。

現地で発掘調査を行っていた当時から、炉跡などが見つかったことにより、この竪穴建物跡は鍛冶作業を行うためのものと考えましたが、これらは言わば状況証拠であり、煮炊きをするのも炉を用いる場合がありますし、焼土も火を焚けば出る可能性があります。鍛冶作業を行っていた決定的な証拠としては、作業時に出る鉄の破片や鍛冶に使う道具、鞆の羽口などが確実なものとされるのですが、現地での発掘調査中にはこれらの確実な証拠は見つかりませんでした。

その後、報告書の作成が始まり、竪穴建物内で検出された焼土の集積から採取した土を水洗し、細かい篩にかけての結果、鍛造剥片（図14）、粒状滓（図15）と呼ばれる、鍛冶で鉄を叩いた時に飛び散った破片が見つかりました。これらはこの場所で鍛冶作業を行っていた確実な証拠と言えるものです。

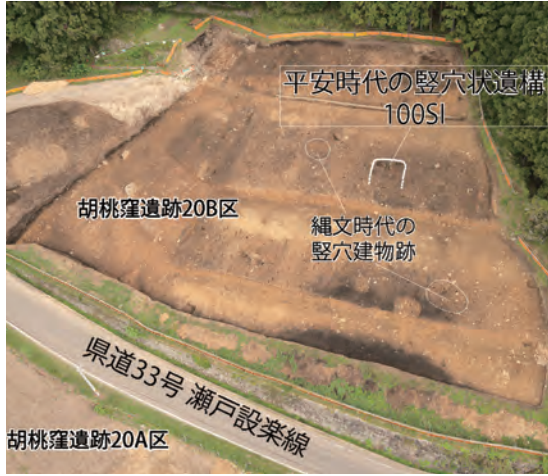


図12 胡桃窪遺跡B区



写真13 胡桃窪遺跡 100SIの炉跡・焼土

今回の胡桃窪遺跡のように、平地の集落と離れてポツンと山中に存在する平安時代の鍛冶遺構は全国各地で存在が知られていましたが、その役割について様々な解釈がされてきました。現在有力とされているのは、木材などの山林資源を採取する際の工具等を修復するための鍛冶遺構とする考え方です。

胡桃窪遺跡は、寒狭川の北岸に位置し、上流の段戸山は良材の産出地として、江戸時代にはしばしば切り出された木材が豊川を経て江戸まで運ばれています（今泉宗男 二〇一四「江戸城に送られた設楽の木材」『文化したら25号』）。胡桃窪遺跡の平安時代の鍛冶遺構も同じように山林資源採取に関わった可能性が高く、周辺にも同様の遺構が存在したと考えられています。（鈴木恵介）

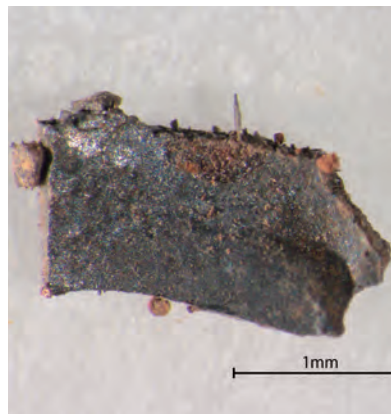


写真14 100SI 出土鍛造剥片

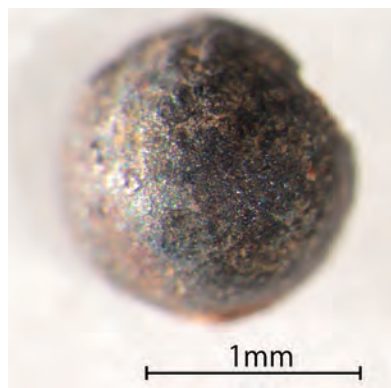


写真15 100SI 出土粒状滓

設楽発掘通信

No.76 令和5年1月号

編集・発行 公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802の24
電話 (0567) 67-4161【管理課】4163【調査課】
ホームページ <http://www.maibun.com>
Facebook <https://www.facebook.com/maibunaichi>
Twitter https://twitter.com/aichi_maibun
印刷・協力 株式会社アーツ